学者アラムハラドの見た着物

宮沢賢治

学者のアラムハラドはある年十一人の子を教えておりました。

みんな立派なうちの子どもらばかりでした。王さまのすぐ下の裁判官の子もありましたし　農商の大臣の子も居ました。また毎年じぶんの土地から十石の香油さえ穫る　長者のいちばん目の子も居たのです。

けれども学者のアラムハラドは小さなセララバアドという子がすきでした。この子が何か答えるときは学者のアラムハラドはどこか非常に遠くの方の凍ったように寂かな蒼黒い空を感ずるのでした。それでもアラ

ムハラドはそんなに偉(えら)い学者でしたからえこひいきなどはしませんでした。

アラムハラドの塾(じゅく)は街(まち)のはずれの楊(やなぎ)の林の中にありました。

　みんなは毎日その石で畳(たた)んだ鼠(ねずみ)いろの床(ゆか)に座(すわ)って古くからの聖歌(せいか)を諳誦(あんしょう)したり兆(ちょう)よりももっと大きな数まで数えたりまた数を互(たがい)に加えたり掛(か)け合せたりするのでした。それからいちばんおしまいには鳥や木や石やいろいろのことを習(なら)うのでした。

　アラムハラドは長い白い着物(きもの)を着て学者のしるしの垂(た)れ布(ぬの)のついた帽子(ぼうし)をかぶり低(ひく)い椅子(いす)に腰掛(こしか)け右手に

は長い鞭をもち左手には本を支えながらゆっくりと教えて行くのでした。

そして空気のしめりの丁度いい日またむずかしい諳誦でひどくつかれた次の日などはよくアラムハラドはみんなをつれて山へ行きました。

このおはなしは結局学者のアラムハラドがある日自分の塾でまたある日山の雨の中でちらっと感じた不思議な着物についてであります。

一

アラムハラドが言いました。

「火が燃(も)えるときは 焔(ほのお)をつくる。 焔というものはよく見ていると奇体(きたい)なものだ。 それはいつでも動(うご)いている。 動いているがやっぱり形もきまっている。 その色はずいぶんさまざまだ。 普通(ふつう)の焚火(たきび)の焔なら 橙(だいだい)いろをしている。 けれども木によりまたその場処(ばしょ)によっては変(へん)に赤いこともあれば大へん黄いろなこともある。 硫黄(いおう)を燃せばちょっと眼(め)のくるっとするような 紫(むらさき)いろの焔をあげる。 それから銅(どう)を灼(や)くときは孔雀石(くじゃくいし)のような明るい青い火をつくる。 こんなにいろはさまざまだがそれはみんなある同じ性質(せいしつ)をもっている。 さっき

云(い)ったいつでも動いているということもそうだ。それは火というものは軽(かる)いものでいつでも騰(のぼ)ろう騰ろうとしている。それからそれは明るいものだ。硫黄のようなお日さまの光の中ではよくわからない焔でもまっくらな処(ところ)に持(も)って行けば立派(りっぱ)にそこらを明るくする。火というものはいつでも照(て)らそう照らそうとしているものだ。それからも一つは熱(あつ)いということだ。火ならばなんでも熱いものだ。それはいつでも乾(かわ)かそう乾かそうとしている。斯(こ)う云う工合(ぐあい)に火には二つの性質がある。なぜそうなのか。それは火の性質だから仕方(しかた)ない。そう云う、熱いもの、乾かそうとするもの、光る

もの、照らそうとするもの軽いもの騰ろうとするものそれを焔と呼(よ)ぶのだから仕方ない。

それからまたみんなは水をよく知っている。水もやっぱり火のようにちゃんときまった性質がある。それは物(もの)をつめたくする。どんなものでも水にあってはつめたくなる。からだをあつい湯(ゆ)でふいても却(かえ)ってあとではすずしくなる。夏に銅の壺(つぼ)に水を入れ壺の外側(そとがわ)を水でぬらしたきれで固(かた)くつつんでおくならばきっとそれは冷(ひ)えるのだ。なんべんもきれをとりかえるとしまいにはまるで氷(こおり)のようにさえなる。このように水は物をつめたくする。また水はものをしめらすのだ。

それから水はいつでも低(ひく)い処へ下ろうとする。鉢(はち)の中に水を入れるならまもなくそれはしずかになる。阿耨達池(あのくだっち)やすべて葱嶺(パミール)から南東の山の上の湖(みずうみ)は多くは鏡(かがみ)のように青く平(たい)らだ。なぜそう平らだかとならば水はみんな下に下ろうとしてお互(たが)い下れるところまで落(お)ち着(つ)くからだ。波(なみ)ができたら必(かなら)ずそれがなおろうとする。それは波のあがったところが下ろうとするからだ。このように水のつめたいこと、しめすこと下に行こうとすることは水の性質(せいしつ)なのだ。どうしてそうかと云(い)うならばそれはそう云う性質のものを水と呼ぶのだから仕方(しかた)ない。

それからまたみんなは小鳥を知っている。鶯(うぐいす)やみそさざい、ひわやまたかけすなどからだが小さく大へん軽(かる)い。その飛(と)ぶときはほんとうによく飛ぶ。枝(えだ)から枝へうつるときはその羽をひらいたのさえわからないくらい早く、青ぞらを向(むこ)うへ飛んで行くときは一つのふるえる点のようだ。それほどこれらの鶯やひわなどは身軽(みがる)でよく飛ぶ。また一生けん命(めい)に啼(な)く。うぐいすならば春にははっきり啼く。みそさざいならばからだをうごかすたびにもうきっと啼いているのだ。

　これらの鳥のたくさん啼いている林の中へ行けばまるで雨が降(ふ)っているようだ。おまえたちはみんな知っ

ている。このように小さな鳥はよく飛びまたよく啼くものだ。それはたべ物をとってしまっても啼くのをやめない。またやすまない。どうして疲れないかと思うほどよく飛びまたよく啼くものだ。

　そんななぜ鳥は啼くのかまた飛ぶのか。おまえたちにはわかるだろう。鳥はみな飛ばずにいられないで飛び啼かずに居られないで啼く。それは生れつきなのだ。

　さて斯う云うふうに火はあつく、乾かし、照らし騰る、水はつめたく、しめらせ、下る、鳥は飛び、またなく。魚について獣についておまえたちはもうみん

なその性質を考えることができる。けれども一体どうだろう、小鳥が啼かないでいられず魚が泳(およ)がないでいられないように人はどういうことがしないでいられないだろう。人が何としてもそうしないでいられないことは一体どういう事だろう。考えてごらん。」

アラムハラドは斯う言って堅(かた)く口を結(むす)び十一人の子供(こども)らを見まわしました。子供らはみな一生けん命(めい)考えたのです。大人(おとな)のように指(ゆび)をまげて唇(くちびる)にあてたりまっすぐに床(ゆか)を見たりしました。その中で大臣(だいじん)の子のタルラが少し顔を赤くして口をまげてわらいました。

アラムハラドはすばやくそれを見て言いました。

「タルラ、答えてごらん。」

タルラは礼をしてそれから少し工合わるそうに横の方を見ながら答えました。

「人は歩いたり物を言ったりいたします。」

アラムハラドがわらいました。

「よろしい。よくお前は答えた。全く人はあるかないでいられない。病気で永く床の上に居る人はどんなに歩きたいだろう。ああ、ただも一度二本の足でぴんぴん歩いてあの楽地の中の泉まで行きあの冷たい水を両手で掬って呑むことができたらそのまま死んでもかまわないと斯う思うだろう。またお前の答えたよう

に人は物を言わないでいられない。

考えたことをみんな言わないでいることは大へんにつらいことなのだ。そのため病気にさえもなるのだ。人がともだちをほしいのは自分の考えたどんなことでもかくさず話しまたかくさずに聴きたいからだ。だまっているということは本統につらいことなのだ。

たしかに人は歩かないでいられない、また物を言わないでいられない。けれども人にはそれよりももっと大切なものがないだろうか。足や舌とも取りかえるほどもっと大切なものがないだろうか。むずかしいけれども考えてごらん。」

アラムハラドが斯う言う間タルラは顔をまっ赤にしていましたがおしまいは少し青ざめました。アラムハラドがすぐ言いました。

「タルラ、も一度答えてごらん。お前はどんなものとでもお前の足をとりかえないか。お前はどんなものとでもお前の足をとりかえるのはいやなのか。」

タルラがまるで小さな獅子のように答えました。

「私は饑饉でみんなが死ぬとき若し私の足が無くなることで饑饉がやむなら足を切っても口惜しくありません。」

アラムハラドはあぶなく泪をながしそうになりま

した。

「そうだ。おまえには歩くことよりも物を言うことよりももっとしないでいられないことがあった。よくそれがわかった。それでこそ私の弟子なのだ。お前のお父さんは七年前の不作のとき祭壇に上って九日祷りつづけられた。お前のお父さんはみんなのためには命も惜しくなかったのだ。ほかの人たちはどうだ。ブランダ。言ってごらん。」

ブランダと呼ばれた子はすばやくきちんとなって答えました。

「人が歩くことよりも言うことよりももっとしないで

いられないのはいいことです。」

アラムハラドが云いました。

「そうだ。私がそう言おうと思っていた。すべて人は善いこと、正しいことをこのむ。善と正義とのためならば命を棄てる人も多い。おまえたちはいままでにそう云う人たちの話を沢山きいて来た。決してこれを忘れてはいけない。人の正義を愛することは丁度鳥のうたわないでいられないと同じだ。セララバアド。お前は何か言いたいように見える。云ってごらん。」

小さなセララバアドは少しびっくりしたようでしたがすぐ落ちついて答えました。

「人はほんとうのいいことが何だかを考えないでいられないと思います。」

　アラムハラドはちょっと眼（め）をつぶりました。眼をつぶったくらやみの中ではそこら中ぼうっと燐（りん）の火のように青く見え、ずうっと遠くが大へん青くて明るくてそこに黄金の葉（は）をもった立派（りっぱ）な樹（き）がぞろっとならんでさんさんさんと梢（こずえ）を鳴らしているように思ったのです。アラムハラドは眼をひらきました。子供（こども）らがじっとアラムハラドを見上げていました。アラムハラドは言いました。

「うん。そうだ。人はまことを求（もと）める。真理（しんり）を求める。

ほんとうの道を求めるのだ。人が道を求めないでいられないことはちょうど鳥の飛ばないでいられないとおんなじだ。おまえたちはよくおぼえなければいけない。人は善を愛し道を求めないでいられない。それが人の性質だ。これをおまえたちは堅くおぼえてあとでも決して忘れてはいけない。おまえたちはみなこれから人生という非常なけわしいみちをあるかなければならない。たとえばそれは葱嶺の氷や辛度の流れや流沙の火やでいっぱいなようなものだ。そのどこを通るときも決して今の二つを忘れてはいけない。それはおまえたちをまもる。それはいつもおまえたちを教える。決

して忘れてはいけない。

それではもう日中だからみんなは立ってやすみ、食事(しょくじ)をしてよろしい。」

アラムハラドは礼(れい)をうけ自分もしずかに立ちあがりました。そして自分の室に帰る途中(とちゅう)ふとまた眼をつぶりました。さっきの美しい青い景色(けしき)がまたはっきりと見えました。そしてその中にはねのような軽(かる)い黄金いろの着物(きもの)を着た人が四人まっすぐに立っているのを見ました。

アラムハラドは急(いそ)いで眼をひらいて少し首をかたむけながら自分の室に入りました。

二

アラムハラドは子供らにかこまれながらしずかに林へはいって行きました。

つめたいしめった空気がしんとみんなのからだにせまったとき子供らは歓呼（かんこ）の声をあげました。そんなに樹（き）は高く深（ふか）くしげっていたのです。それにいろいろの太さの蔓（つる）がくしゃくしゃにその木をまといみちも大へんに暗（くら）かったのです。

ただその梢（こずえ）のところどころ物凄（ものすご）いほど碧（あお）いそらが

一きれ二きれやっとのぞいて見えるきり、そんなに林がしげっていればそれほどみんなはよろこびました。

大臣の子のタルラはいちばんさきに立って鳥を見てはばあと両手をあげて追い栗鼠を見つけては高く叫んでおどしました。走ったりまた停ったりまるで夢中で進みました。

みんなはかわるがわるいろいろなことをアラムハラドにたずねました。アラムハラドは時々はまだ一つの答をしないうちにも一つの返事をしなければなりませんでした。

セララバアドは小さな革の水入れを肩からつるして

首を垂(た)れてみんなの問(とい)やアラムハラドの答をききながらいちばんあとから少し笑(わら)ってついて来ました。林はだんだん深(ふか)くなりかしの木やくすの木や空も見えないようでした。

そのときサマシャードという小さな子が一本の高いなつめの木を見つけて叫びました。

「なつめの木だぞ。なつめの木だ。とれないかなあ。」

みんなもアラムハラドも一度(いちど)にその高い梢を見上げました。アラムハラドは云(い)いました。

「あの木は高くてとどかない。私どもはその実(み)をとることができないのだ。けれどもおまえたちは名高い

ヴェーッサンタラ大王のはなしを知っているだろう。ヴェーッサンタラ大王は檀波羅蜜の行と云ってほしいと云われるものは何でもやった。宝石でも着物でも喰べ物でもそのほか家でもけらいでも何でもみんな乞われるままに施された。そしておしまいとうとう国の宝の白い象をもお与えなされたのだ。けらいや人民ははじめは堪えていたけれどもついには国も亡びそうになったので大王を山へ追い申したのだ。大王はお妃と王子王女とただ四人で山へ行かれた。大きな林にはいったとき王子たちは林の中の高い樹の実を見てああほしいなあと云われたのだ。そのとき大王の徳

には林の樹もまた感じていた。樹の枝はみな生物のように垂れてその美しい果実を王子たちに奉った。
　これを見たものみな身の毛もよだち大地も感じて三べんふるえたと云うのだ。いま私らはこの実をとることができない。けれどももしヴェーッサンタラ大王のように大へんに徳のある人ならばそしてその人がひどく飢えているならば木の枝はやっぱりひとりでに垂れてくるにちがいない。それどころでない、その人は樹をちょっと見あげてよろこんだだけでもう食べたとおんなじことにもなるのだ。」
　アラムハラドは斯う云ってもう一度林の高い木を見

あげました。まっ黒な木の梢（こずえ）から一きれのそらがのぞいておりましたがアラムハラドは思わず眼（め）をこすりました。さっきまでまっ青（さお）で光っていたその空がいつかまるで鼠（ねずみ）いろに濁（にご）って大へん暗（くら）く見えたのです。樹はゆさゆさとゆすれ大へんにむしあつくどうやら雨が降（ふ）って来そうなのでした。

「ああこれは降って来る。もうどんなに急（いそ）いでもぬれないというわけにはいかない。からだの加減（かげん）の悪（わる）いものは誰々（だれだれ）だ。ひとりもないか。畑（はたけ）のものや木には大へんいいけれどもまさか今日こんなに急（きゅう）に降るとは思わなかった。私たちはもう帰らないといけない。」

けれどもアラムハラドはまだ降るまではよほど間(ま)があると思っていました。ところがアラムハラドの斯(こ)う云ってしまうかしまわないうちにもう林がぱちぱち鳴りはじめました。それも手をひろげ顔をそらに向(む)けてほんとうにそれが雨かどうか見ようとしても雨のつぶは見えませんでした。

ただ林の潤(ひろ)い木の葉(は)がぱちぱち鳴っている〔以下原稿数枚？なし〕

入れを右手でつかんで立っていました。〔以下原稿

〔空白〕

底本：「インドラの網」角川文庫、角川書店
　　　１９９６（平成８）年４月25日初版発行
底本の親本：「新校本　宮澤賢治全集」筑摩書房
　　　１９９５（平成７）年５月～
入力：土屋隆
校正：田中敬三
２００５年９月10日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。